第４回市史講座ミニレポート：平成 29 年 7 月 15 日（土）

「初期松江城天守の形態と千鳥破風」

講師：和田嘉宥先生（松江市史編集委員／松江城部会）、稲田信（松江市史料編纂課長）

今回の講座は、「初期松江城天守の形態と千鳥破風」という題で報告していただきました。

はじめに稲田信・松江市史料編纂課長から、近年の松江城の研究状況について説明がありました。

国立公文書館に現在所蔵されている「出雲国松江城絵図」は、正保年間（1644～48）に江戸幕府に提出された絵図とされていますが、この絵図に描かれている松江城天守と、現在、松江城山にそびえる天守の姿は、大きく異なっていることが指摘されています。すなわち、現在の天守にはない「千鳥破風」が描かれているのです。そして、松江市史の編集委員からも、正保の城絵図自体、江戸幕府に提出するために作成したものであり、嘘は描けないはずだ（正確な報告をするはずではないか）、とする意見が出ています。

そこで、あらためて文献史料や絵図史料を集めて調査すると、延宝２年（1672）の松江城絵図までは天守が正保の絵図に類似した姿で描かれており、元文３年（1738）から後の絵図では現状の天守に近い姿であることが分かったと説明がありました。

次に、和田嘉宥先生が松江城天守内部の調査状況について論じられました。

まず、正保の城絵図について基本的な情報を紹介し、江戸幕府は城の大きさ・堀の深さや広さ・天守の情報等を記載するよう求めていたこと、松江城の絵図には国立公文書館と松江藩家老・乙部家所蔵の二種類があることを述べられました。また、現存の正保の城絵図では、天守を「層塔型」に描いていることが多いとされました。

続いて、松江城天守に残る痕跡として、昭和 25 年（1950）から行われた修理工事で史料調査に関わった須田主殿氏の調査資料と、天守に残されている柱の貫跡を紹介し、初期の破風の位置について考察しました。

また、記録から確認できる修理歴として、松江城天守の木材に残された墨書・修理絵図・文献などを元に、元文２年（1737）～寛保３年（1743）にかけて大規模な修繕が行われたこと、この時期に松江城天守が現在の形状に改変された可能性に言及しました。

そして、これらの調査研究を踏まえて、初期松江城天守の復原図を作成し、紹介されました。

和田先生は締めくくりに、松江城についてはまだまだ多くの課題があると述べ、今回の講座では、現存の天守は 1740 年頃の修復後の姿を伝えるものと推測し、その復原を試みたが、天守が慶長 16 年（1611）創建であることは間違いなく、通し柱や包板による天守構造は松江城独特のもので、不変の価値を有する、と結論づけました。

最後に、稲田課長が、松江市では平成 21 年頃から県内外の研究者と連携して歴史に関する調査研究が進められ、市域の歴史研究の基礎が整ってきたことを述べました。近年、市域で続く新発見や松江城国宝指定の背景には、こうした調査研究の深化があり、今後とも、地域に埋もれている史料や歴史的公文書等の調査と保全を続けていく大切さについて説明がありました。